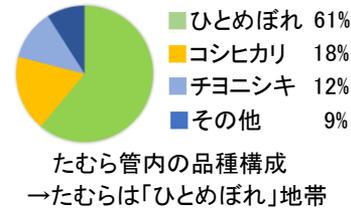
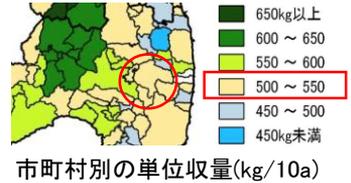


# 「里山のつぶ」を活用した産地化の推進 ～新しい時代を創る！「たむら」の米づくり～

県中農林事務所田村農業普及所

## 背景

- (1) たむら地域における水稲の平均収量は、県内の中でも低い水準
  - ・ 中山間特有の多様なほ場条件（日照条件、水管理等）により、同じ生産者でもほ場による収量差が大きい
- (2) 品種は「ひとめぼれ」に偏重し、規模拡大は困難な状況
  - ・ 標高が高く、気候が冷涼であることから、晩生品種や直播では収量が確保できない



**経営安定のためには、品種構成の改善が急務**

## ねらい

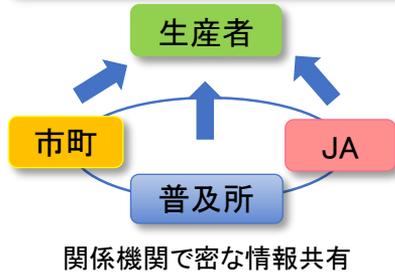
- ・ 収量増加による農業者の収入の向上
- ・ たむら地域における売れる米づくり

## 「里山のつぶ」導入

- ・ 「ひとめぼれ」と比較して、**出穂期は約3日、成熟期は約6日ほど早く迎える**
- ・ いもち病や冷害に強く、倒伏しにくく、「ひとめぼれ」と比較して**収量性に優れた品種**

- ・ 収量確保
- ・ 作期分散
- ・ 規模拡大

## 活動内容① 作付推進に向けた活動体制の構築



- ・ JAと連携し、H29に管内7カ所（180a）にて栽培、意見交換

- ・ **当地域に適していることを確認！**

**「里山のつぶ」を地域の「顔」として育てていく意識を共有**

## 活動内容② 関係機関・団体と連携した作付推進活動

(1) 献穀米 (H30)



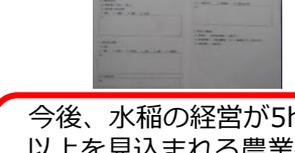
献穀米を契機とした地域への波及

(2) 情報提供 (稲作情報、普及だより)



収量向上・品質確保、種子注文時期に合わせたタイムリーな周知、販売面も意識した文章

(3) 規模拡大支援



今後、水稲の経営が5ha以上を見込まれる農業者をリストアップ、重点的に推進(R2～)

## 活動内容③ 増収に向けた現場の課題把握とその解決策

生産者(34名)にアンケート調査を実施(H30)

- ・ひとめぼれ 512kg/10a
- ・里山のつぶ 492kg/10a

収量が確保できなかった要因の解析

増収に向け、施肥水準の検討(R元)



- ・N6kg/10a (慣行)
- ・N8kg/10a (実証)

実証ほの設置

作付推進チラシへ反映(R2)



結果を周知

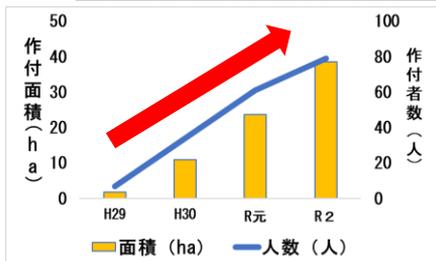
## 活動内容④ JA稲作部会と連携した売れる米づくりに向けた検討

- ・売れる米づくりに向けて、JA稲作部会に対し、ワークショップ及びアンケート調査を実施(H28)
- ・先進地視察研修を実施、売れる米づくりに向けて、検討を重ねる(H28～)

良食味米を生産へ!

## 活動成果

### (1) 作付面積及び作付者数が拡大



図「里山のつぶ」作付面積及び作付者数の推移

- ・献穀米の取組を受け、H法人が「里山のつぶ」を導入
- 規模拡大につながる(H30と比較して、R2は+3ha)

### (2) 売れる米づくりに向けた検討

- ・JA稲作部会主催で、食味コンクールが開催(H29～)
- ・県オリジナル品種部門が創設され生産者の意識が向上(R元)



### (2) 収量確保に向けた施肥体系の確立

表 基肥N6kg/10a(慣行区)と基肥N8kg/10a(実証区)の比較(追肥は各N2kg/10a)  
R1 田村農業普及所

試験区	精玄米重 (kg/a)	整粒歩合 (%)	玄米タンパク (%)	食味値	味度値	想定される所得の慣行区との差額 (千円)
慣行区(6-2)	70.0	85.9	6.3	76.5	74.2	—
実証区(8-2)	74.6	83.3	6.6	74.5	73.6	+6

- ・基肥の施肥量はN成分で8kg/10a+追肥N2kg(N6kg/10aと比較して品質・食味に大きな差はなし)
- ・肥料代等のコストを考慮しても、収量増加により収益は向上

### この施肥体系を導入した実際の事例(R2)

- ・A氏のケース 490kg/10a(慣行)→780kg/10a
  - ・B氏のケース 510kg/10a(慣行)→570kg/10a
- 収量が向上**

## 今後の活動・方向性

- (1) 生産量拡大に向けたさらなる作付推進
  - ・経営規模に応じた「ひとめぼれ」との適切な作付割合の提示
- (2) 品質向上及び収量確保
  - ・斑点米カメムシ類防除の徹底、気象に左右されない米づくり支援
- (3) たむら地域における売れる米づくり
  - ・食味コンクールを契機とした部会の活性化

「里山のつぶ」導入を契機とした新たな「たむら米」のブランド化へ